

群馬大学教育実践研究 第35号 125～135頁 2018

教員養成大学学生の「体育」認識について考える ——小学校教科専門の授業を通して——

福 地 豊 樹・中 雄 勇 人

群馬大学教育学部保健体育講座

A study of recognition to “physical education” of the teacher training college student

Toyoki FUKUCHI, Hayato NAKAO

Department of Health and Physical Education, Faculty of Education, Gunma University

キーワード：体育、教員養成、運動、スポーツ

Keywords：physical education, teacher training, exercise, sports

(2017年8月31日受理)

I はじめに

教員養成大学のカリキュラムは平成10年の教員免許法改正を受けて大きく様変わりした。教職専門科目の増加に伴うかたちで、教科専門の必修科目が減じられていったことは周知の通りである。これには理由があるのだが、そのこととは別に、各教科の専門性は保たれてゆくのかといった不安は多く、各大学は免許法の最低必修単位に上乘せする形で、大学卒業要件の単位を増す方策をとった。群馬大学も例外ではなく、各専攻ともに、単位取得可能な範囲で、習得単位を設定した^{注1)}。

小学校教員にとって、従来8教科は必須のものであったはずだったが、免許法改正に伴い、様々な取得状況が生まれてしまった。群馬大学教育学部にあっては、小学校と中学校との両方の免許取得のコース制が導入され、小学校教科専門科目の音楽、美術、体育は実技教科内選択とされてしまった^{注2)}。その結果、小学校教科専門科目（群馬大学では「初等科体育」）の受講学生は減少傾向をたどることになった。今回の受講学生の専攻の偏りは、その結果であり、何と教育学部学生の2割の受講生に留まっている。教育専攻と教

育心理専攻のみが、この授業が必修とされており、恐らくこの指定がなければ、初等科体育の受講生は教育学部学生の一割を切ることが推測される。これは、群馬大学の履修制度の問題点であり、今回の「体育」に関する学生の認識も、それらの要件から無関係ではないと思われる。本稿では、平成29年前期の初等科体育（火曜日、木曜日、金曜日）の3コマに開講されている授業を通して、学生の「体育」に関する認識・考え方に関して、少しの考察を加えてゆくことにしたい。

II 29年前の問いかけは有効であったのか

保健体育講座では、1988年に教育実践センター紀要に次のような報告をまとめている。

「教員養成大学学生の『体育』認識について～小学校の『体育』教育に必要な資質への問いかけ～」^{注3)}

その検討の意図を2点あげており、次のようなものであった。

「ひとつは、『体育』教育のあり方を考えたいということである。特に、小学校においては、教師は全教科を担当せねばならず、『実技』教科として位置付けられる体育科は、教師の体育理解や、教師の実技能力の

問題を含めて、様々な問題をかかえているのが現状である。・・・学生たちの多くは将来高い確率で教師となる。・・・したがって、現在の学生達の『運動』『体育』認識から、『体育』問題の視点を垣間見ることが可能であろう。ふたつには、そのような『体育』を教える教師の養成をどのように行ってゆくべきかを探ることである。」^{注4)}

このような意図のもとに、当時の「体育教材研究」(必修の教職専門科目)受講生326名に対し、アンケート調査がなされた^{注5)}。

学生の運動や体育に対する意識や考え方の傾向について、以下のように指摘している。

「おおまかな言いかたをすれば、学生達の大部分は運動好きであった。そして何よりも、楽しさやそれに伴う気分転換といった受け取り方、さらには健康の維持増進といった現実的な課題に関心を寄せていた。一方『体育』となると事情は変化し、好きな者の数は低下する。運動は良いが体育はどうも苦手だという事らしい。」^{注6)}

「我々が想定した体育の学習上の他の要件、特に運動の法則や原理の理解、運動の文化的歴史的価値はごく少数に留まった。このことは、『教える』立場を想定しての問いに対しても顕著であり、運動の楽しさや仲間づくり、体力づくりは教えられるが、技術の習得や身体・運動への知識理解は極端に少ない値を示した。体育学習＝とにかく『運動すること』という等式的理解は、体育や運動の本質的理解からはほど遠く・・・」^{注7)}

できる、できないという実際の体育授業の経験が運動することに結び付き、平凡な等式的理解を生み出していると指摘している。このことは、運動の理解や技能の獲得が体育授業というより、運動部活動によって獲得されたとする傾向とも重なり、教科の体育学習の

あり方がまさに問われているという指摘に結びついてゆく。

「教える」ことを意識した質問項目に対しても、興味関心は球技に集中しており、水泳、陸上運動、器械運動、表現運動などは、苦手とする傾向であり、「運動教材(運動財)がそれぞれどんな学習の意味を担っているのかの知識は欠落したまま」^{注8)}と指摘する。

このような学生の傾向は、実際の学生たちの経験に裏付けられたものと考えことができ、教員養成段階の体育授業の取り組みにも、「実技」と「理論」を上手く組み合わせる余地のあることが示唆されている。学生の認識を変える最前線としての教員養成大学の使命が残されたものとして意識されている。

Ⅲ 小学校教科専門の授業「初等科体育」の実態

ここ3年間の初等科体育の受講生の実態は表1^{注9)}に示すとおりである。

受講生の減少には歯止めがかかっていない状況である。

その授業の概要は資料1^{注10)}に示す通りであり、陸上運動、器械運動、水泳の3つの運動領域から構成されていたが、平成29年度は事情により水泳が抜け、陸上運動と器械運動の2領域の内容となり、実技を主に行いながら、講義も交えた内容としている。以下のアンケートは授業初回時に回答を求めた。

1 学生の体育および運動についての認識：アンケート結果

体育の好き嫌い、体育の成績、運動の好き嫌いに関する質問に対しては、表2のような結果であった。体育、運動に関しては、好きとした学生が多く、小学

表1 初等科体育の過去3年の受講者数

| | | | | | |
|-------|--------------|------|-----|-----|-----|
| 2015年 | 初等科体育(一) 21名 | 数学16 | 国語2 | 英語2 | 美術1 |
| | 初等科体育(二) 18名 | 教育8 | 教心6 | 社会2 | 家政2 |
| | 初等科体育(三) 24名 | 理科18 | 障害5 | 美術1 | |
| | 63名 | | | | |
| 2016年 | 初等科体育(一) 2名 | 国語1 | 数学1 | | |
| | 初等科体育(二) 18名 | 教育7 | 教心7 | 社会4 | |
| | 初等科体育(三) 21名 | 理科8 | 障害9 | 美術4 | |
| | 41名 | | | | |
| 2017年 | 初等科体育(一) 1名 | 英語1 | | | |
| | 初等科体育(二) 15名 | 教育7 | 教心6 | 社会2 | |
| | 初等科体育(三) 33名 | 理科20 | 障害7 | 音楽3 | 社会1 |
| | 49名 | 英語1 | 数学1 | | |

資料1 初等科体育（一・二・三）の授業概要

担当 福地豊樹・中雄勇人（保健体育講座）

本授業は「小学校体育教材の実習と指導法」に関する内容であり、特に「陸上運動領域」、「体操・器械運動領域」、の2領域について学習します。いずれも人間にとって基本的な運動であり、それぞれの特性を理解することを目標とします。

「陸上運動領域」 担当：中雄勇人

陸上運動は、「走・跳・投」という日常生活でも基本的な運動を、自らの体験を通じて子どもたちに、いかに楽しく伝えていくかを学んでいただきます。ただ、経験するだけでなく、「子どもたちにどのように伝えていくのか」「子どもにとって、より良い運動とは何なのか」を常に考えながら授業を進めていきます。

「体操・器械運動領域」 担当：福地豊樹

体操や器械運動は自分の身体（からだ）を理解する重要な領域です。難しい運動と考えていませんか。そのような既成概念を取り払うこと、ぜひ挑戦してみてください。

◆授業計画

| 回数 | 担当者 | 場所 | 授業内容等 |
|----|-------|--------------|-----------|
| 1 | 福地・中雄 | 講義室 | オリエンテーション |
| 2 | 中雄 | 陸上競技場および大学周辺 | 走運動の基本 |
| 3 | 中雄 | 陸上競技場および大学周辺 | 走運動の基本 |
| 4 | 中雄 | 陸上競技場および大学周辺 | リレーを楽しむ |
| 5 | 中雄 | 陸上競技場および大学周辺 | ハードル走 |
| 6 | 中雄 | 陸上競技場および大学周辺 | ハードル走 |
| 7 | 中雄 | 陸上競技場および大学周辺 | 走幅跳び |
| 8 | 中雄 | 陸上競技場および大学周辺 | 走高跳び |
| 9 | 福地 | 第二体育館 | 体操 |
| 10 | 福地 | 第二体育館 | 体操 |
| 11 | 福地 | 第二体育館 | マット |
| 12 | 福地 | 第二体育館 | マット |
| 13 | 福地 | 第二体育館 | とび箱 |
| 14 | 福地 | 第二体育館 | 鉄棒 |
| 15 | 福地 | 講義室 | 講義 |

校・中学校・高校の成績についても、良い・平均的とする割合は高かった。高校時の成績だけはやや異なっていた（良い30%、平均的60%、悪い9%）。

好きな理由は、楽しい（35名、59.3%）健康に良い（8名、13.6%）であり、嫌いな理由は、できない（6名、10.2%）、楽しくない（6名、10.2%）、疲れる（4名、6.8%）となっている（表3-1）。

運動の実践は表3-2に示す通りであり、全くしてないひと約3割いる。

運動の役割については、表3-3に示す通りである

が、健康・体力の保持増進（24名、28.6%）、楽しみ（18名、21.4%）、気分転換（14名、16.7%）ストレスの解消（10名、11.9%）と続く。

自分たちの持ち得ている技能が培われた場所は、どこかについては、学校の運動部活動が一番であり（31名、44.9%）、教科の体育とする学生を（17名、24.6%）上回った結果であった。地域スポーツクラブとするものも11名（15.9%）であり、家庭5名（7.2%）と続く（表3-4）。

楽しむことができる運動種目は何かについては、表

表2 体育・運動の好き嫌い・成績

| 体育が好き | 好き | どちらともいえない | 嫌い |
|-------|----|-----------|----|
| 小学校 | 28 | 12 | 6 |
| 中学校 | 27 | 13 | 6 |
| 高校 | 26 | 16 | 4 |
| 体育の成績 | 良い | 平均的 | 悪い |
| 小学校 | 19 | 22 | 5 |
| 中学校 | 21 | 22 | 3 |
| 高校 | 14 | 28 | 4 |
| 運動が好き | 好き | どちらともいえない | 嫌い |
| 小学校 | 30 | 9 | 7 |
| 中学校 | 30 | 9 | 7 |
| 高校 | 33 | 8 | 5 |

(人数)

表3 運動に関する質問項目

| 1 運動が好きな・嫌いな理由 | 人数 | % | 6 運動の関心 | 人数 | % |
|----------------|----|------|----------------|-----|------|
| 楽しい | 35 | 59.3 | 関心がある | 25 | 54.3 |
| 健康に良い | 8 | 13.6 | 関心をもつことがある | 19 | 41.3 |
| 仲間ができる | 0 | 0 | 関心がない | 2 | 4.3 |
| 疲れる | 4 | 6.8 | | 46 | |
| できない | 6 | 10.2 | 7 どのような関心か | 人数 | % |
| 楽しくない | 6 | 10.2 | 技術を身につけるための方法 | 16 | 16.8 |
| その他 | 0 | | 運動が心身に与える影響や効果 | 14 | 14.7 |
| | 59 | | 運動を通じた仲間との交流 | 11 | 11.6 |
| 2 運動の実践 | 人数 | % | 運動の法則や原理の理解 | 4 | 4.2 |
| 毎日 | 1 | 2.1 | 運動の文化的価値 | 3 | 3.2 |
| 週3～4 | 11 | 23.9 | 運動の楽しみ・楽しみ方 | 19 | 20 |
| 週1～2 | 14 | 30.4 | スポーツに関するニュース | 12 | 12.6 |
| それ以下 | 7 | 15.2 | スポーツの観戦 | 13 | 13.7 |
| 全くしない | 13 | 28.3 | その他 | 3 | 3.2 |
| | 46 | | | 95 | |
| 3 運動の役割 | 人数 | % | 8 知識を身につけているか | 人数 | % |
| 健康・体力の保持増進 | 24 | 28.6 | 系統的に学び身につけている | 1 | 2.2 |
| 気分転換 | 14 | 16.7 | 断片的に学び身につけている | 34 | 73.9 |
| 暇つぶし | 4 | 4.8 | 全く身につけていない | 11 | 23.9 |
| 仲間づくり | 4 | 4.8 | | 46 | |
| ストレスの解消 | 10 | 11.9 | 9 どのように身につけたか | 人数 | % |
| 自己への挑戦 | 8 | 9.5 | 教科体育 | 20 | 35.7 |
| 生涯運動に親しむ力となる | 1 | 1.2 | 運動部活動 | 22 | 39.3 |
| 楽しみ | 18 | 21.4 | 地域スポーツクラブ | 7 | 12.5 |
| その他 | 1 | 1.2 | 家庭 | 0 | 0 |
| | 84 | | その他 | 7 | 12.5 |
| 4 技能が培われた場 | 人数 | % | | 56 | |
| 教科体育 | 17 | 24.6 | | | |
| 運動部活動 | 31 | 44.9 | | | |
| 地域スポーツクラブ | 11 | 15.9 | | | |
| 家庭 | 5 | 7.2 | | | |
| その他 | 5 | 7.2 | | | |
| | 69 | | | | |
| 5 楽しめる種目 | 人数 | | 人数 | | |
| 体操 | 4 | | ダンス | 8 | |
| バレーボール | 24 | | 水泳 | 14 | |
| バスケットボール | 22 | | スキー | 13 | |
| サッカー | 15 | | スケート | 6 | |
| 野球 | 18 | | 柔道 | 4 | |
| 卓球 | 19 | | 剣道 | 3 | |
| バドミントン | 28 | | テニス | 8 | |
| 器械運動 | 6 | | ソフトテニス | 13 | |
| 陸上競技 | 13 | | その他 | 3 | |
| | | | | 149 | |

3-5のような結果であり、球技種目に集中していることが分かる。

運動への関心は高く、関心がある(25名、54%)、関心を持つことがある(19名、41.3%)、関心がないとするものも2名ほどいた(表3-6)。

その関心のある内容についての質問は、表3-7の通りであり、運動の楽しみ・楽しみ方(19名、20%)、技術を身につけるための方法(16名、16.8%)、運動が心身に与える影響や効果(14名、14.7%)、スポーツの観戦(13名、13.7%)と続く。運動の法則や原理の理解、運動の文化的価値などは、低い傾向にあった。

運動に関する知識を身につけているかという質問に対しては、断片的に学び身につけているとするものが圧倒的に多く(34名、73.9%)、全く身につけていないとするものも、11名(23.9%)と多い。系統的に学び身につけているとするものは1名のみであった(表3-8)。

それらの知識を身につけた場合はどこかに関しては、運動部活動(22名、39.3%)と教科体育(20名、35.7%)が接近していた(表3-9)。

体育授業への関心については、表4-1の通りであり、健康づくり・体力づくりに必要な場が35名、46.7%と多く、次に、技能を身につける場(14名、18.7%)、身体・健康・運動についての理解を深める場(11名、16.7%)と続く。

教える自信がある教科と自信がない教科は何かを聞いた質問では、表4-2に示す通りである、国語・社会・算数・理科の4教科に自信ありとする学生が比較的多く、体育・音楽・理科・家庭・図工を自信がないとする割合が高い。

自信をもって教えられる体育の運動領域について聞いた質問では、表4-3のような傾向であった。球技を自信ありとする学生が多く、ダンス(表現運動)、陸上運動、器械運動を自信がないとする学生が多かった。

教えることができる体育の内容については、表4-4に示す通りである。運動の楽しさ(27名、38%)、仲間との協力(22名、31%)、体力づくり(14名、19.7%)と続く、技術の習得(3名、4.2%)、身体や運動の知識理解(3名、4.2%)とするものは、少ない。

身につけている力で、教える時に役立つ力は何かという質問に対しては表4-5に示す通りであり、同時

に欠けている力は何かという質問も同じ項目で聞いている。身につけているとする力で一番多かった回答は、子どもの心身についての理解(15名)であり、運動教材についての理解、教師自ら示範できる能力、教授方法といった項目は、少ない人数であり、それらの項目については、欠けているとする学生の割合は高かった。

体育授業時に示範が必要な時はどのように対処するかという質問に対しては、表4-6のような傾向であり、不得意な種目を教える時とはという質問には表4-7のような答えであった。

2 学生の考え方の傾向

上記の学生への回答から、いくつかの傾向を見出すことができる。

- 1) 体育や運動に関する好みでは、比較的好きとする学生が多く、体育の成績もおおむね良好であった学生が多い。
- 2) 運動経験では、中学校時代に運動部活動に所属していた学生が多く、高校でも約半数の学生が運動に接していた。ただし、現在はあまり運動習慣はない。
- 3) 運動が好きな理由は楽しい、健康に良いということがらであり、運動の役割理解も、健康の保持増進、楽しみ、気分転換ということがらを主に考えている。
- 4) 楽しむための技能が培われた場所は、運動部活動であった。教科体育をそのように捉えている学生は運動部活動を下回っていた。
- 5) 楽しめる運動の種目は多技にわたっていたが、球技種目が圧倒的に多かった。
- 6) 運動への関心は強いが、楽しみ方、技術の身につけ方が主なものであり、運動の法則や原理の理解や運動の文化的価値などへの関心は極めて低い。
- 7) しかし、それら知識理解や身につけている程度は低い。
- 8) 体育授業に関する主な関心は、健康づくり、体力づくりに必要な場と理解している。
- 9) 教えることのできる体育の内容は、運動の楽しさ仲間との協力であり、技術の習得や身体や運動の知識理解は欠けたままとなっている。このことは、教える時に自分に欠けている力に運動教材についての理解、教授方法を第一にあげていることから

表4 体育授業に関する質問項目

| 1 体育授業の関心 | 人数 | % |
|--------------------------|-------|-------|
| 健康づくり・体力づくりに必要な場 | 35 | 46.7 |
| 技能を身に着ける場 | 14 | 18.7 |
| 身体・健康・運動についての理解を深める場 | 11 | 16.7 |
| 心身の解放の場 | 9 | 12 |
| 仲間づくりの場 | 6 | 8 |
| その他 | 0 | 0 |
| | 75 | |
| 2 自信のある教科と自信のない教科 | あり:人数 | なし:人数 |
| 国語 | 9 | 14 |
| 社会 | 12 | 15 |
| 算数 | 17 | 15 |
| 理科 | 19 | 19 |
| 体育 | 4 | 26 |
| 音楽 | 4 | 23 |
| 図工 | 10 | 16 |
| 家庭 | 5 | 18 |
| 英語* | 9 | 14 |
| 道徳* | 10 | 15 |
| | 99 | 175 |
| 3 自信をもって教えられる種目と自信のない種目 | あり:人数 | なし:人数 |
| 体づくり・体ほぐし(体操) | 6 | 21 |
| 器械運動 | 4 | 22 |
| 球技 | 19 | 16 |
| 陸上運動 | 8 | 22 |
| 表現運動(ダンス) | 4 | 27 |
| 水泳 | 9 | 24 |
| 武道* | 3 | 30 |
| | 53 | 162 |
| 4 教えることができること | 人数 | % |
| 運動の楽しさ | 27 | 38 |
| 体力づくり | 14 | 19.7 |
| 技術の習得 | 3 | 4.2 |
| 身体や運動の知識理解 | 3 | 4.2 |
| 仲間との協力 | 22 | 31 |
| その他 | 2 | 2.8 |
| | 71 | |
| 5 身につけている教える時に役に立つ力 | あり:人数 | なし:人数 |
| 体育についての理解 | 12 | 27 |
| 子どもの心身についての理解 | 15 | 17 |
| 運動教材についての理解 | 7 | 33 |
| 教授方法 | 6 | 30 |
| 子どもの能力(実態)を見抜く力 | 10 | 22 |
| 教師自ら示範できる能力 | 7 | 28 |
| その他 | 8 | 5 |
| | 65 | 162 |
| 6 示範が必要な時 | 人数 | % |
| 自分にできる得意な技術や種目は試みる | 13 | 22 |
| 得意、不得意にかかわらず試みる | 22 | 37.2 |
| 子どもに行なわせながら指導をし、自分ではやらない | 6 | 10.1 |
| 指導書・図・写真などの補助資料により指導する | 18 | 30.5 |
| その他 | 0 | 0 |
| | 59 | |
| 7 不得意な種目を教える時 | 人数 | % |
| 不得意な種目は、なるべく避ける | 0 | 0 |
| どのような場合でも指導する | 8 | 11.3 |
| 他の教師の力をかりる | 27 | 38 |
| 不得意なものは自ら練習し、克服しながら授業に臨む | 20 | 28.1 |
| 合同体育を取り入れる | 10 | 14.1 |
| 体育専科制を取り入れる | 5 | 7 |
| その他 | 1 | 1.4 |
| | 71 | |

* は参考に聞いた項目

も知ることができる。

- 10) それにも関わらず、体育時の示範や不得意種目を教える際には、どこまでも前向きな姿勢を示していた。

このような学生の傾向は、今回の初等科体育受講生の限られた範囲の出来事であるのか、検討の余地は残されているが、私たちに多くの反省材料を提供してくれている。つまり、学生たちの認識の形成には、これまでの学校経験が反映されていることが指摘できよう。体育の内容を健康づくり・体力づくり、その保持増進にあげていることは、まさに体育の目的とするところであり、間違ったものではない。技能への関心やそれを駆使しての運動の楽しみ方を学んで来ているはずである。ただし、学生の回答からは、運動の法則や原理、運動の文化的な価値など、学ばねばならないことがらが、抜け落ちていることが分かる。この一連の質問の中に、教師になった時に必要な知識や能力は何かという問いを含めている意図は、そうした事柄に対する学生の自覚を惹起することを想定している。運動教材に対する知識理解、教授方法など、児童生徒時代に意識することは少ない。運動の技術の体系的な理解は、技能獲得に必要なことであるが、実際の体育授業では極めて難しいこととされてしまっている。現場の体育の授業にとって重要な課題であることが、認識されるべきものと言える。運動や身体理解に対する教科体育の役割は大きいにも関わらず、運動部活動で、そのような技能獲得や知識理解を行ってきたという学生の傾向には注意を払わなければならない。まさに体育のあり方が問われかねない課題を含んでいる。

IV 29年前の学生と違うのか

前述の通り、前回の調査との直接的な比較には、学生の専攻の偏りがあり、正確を期すことはできないと思われるが、いくつか参考になるであろう項目もあげることができる。その点について、触れてみたい。

＜仲間＞ということばをキーワードに考えることができる。

運動が好きな理由：「仲間ができる」

（今回 0%・前回24.2%）

運動の役割：「仲間づくり」

（今回 4.8%・前回 1.9%）

運動へはどのような関心か：「運動を通じた仲間との交流」（今回 11.6%・前回 38.5%）

体育授業への関心：「仲間づくりの場」

（今回 8%・前回 1.2%）

教師として教えることができること：「仲間との協力」（今回 31%・前回 51.9%）

学生の運動への関心や教師として教えることができること等「仲間づくり」に関連した項目は、今回、前回とも重視する順位は高いが、自分自身の体験からを反映する回答項目では、仲間づくり・仲間との交流の数値は極端に低く、理念と実際の乖離を推測することができる。つまり、運動や体育の場面で仲間との関わりが必ずしも成功裏に体験できていないことを物語っていると言えるかも知れない。

＜技能や知識＞ということばに関連しても、いくつかの特徴を見ることができる。

技能が培われた場は教科体育

：今回 24.6%・前回 30.8%

運動部活動：今回 44.9%・前回 55.4%

地域スポーツクラブ

：今回 15.9%・前回 1.9%

家庭：今回 7.2%・前回 10.8%

知識を身に付けた場は教科体育

：今回 35.7%・前回 52.3%

運動部活動：今回 39.3%・前回 24.6%

地域スポーツクラブ

：今回 12.5%・前回 0.8%

家庭：今回 0%・前回 1.2%

その他：今回 12.5%・前回 4.3%

教科体育の存在理由を確実のものにするためにこそ、この数値を問題にしたいと思っていたが、今回の結果は技能・知識を身に付けた場を運動部活動とする回答が教科体育を上回った。また、地域スポーツクラブとする回答の増加は著しく、現実社会のスポーツ実施状況を反映したものとなっている。今回、その他とする回答が12.5%と地域スポーツクラブに匹敵する数値となっているが、その詳細は質問項目として設定しておらず、確かめられていない。友人同士等のパーソナルな理由があげられるのかも知れない。

＜示範＞を必要とする時にはという質問に対しては、今回前回ともに積極的な姿勢には大きな変化はなかったが、「指導書・図・写真などの補助資料により

指導する」という数値（今回30.5%・前回1.9%）は、各段に高くなっている。これなど、教授方法に関する補助教材のバリエーションの拡大が大きく関わっていると思われる。視聴覚教材・機器の利用は、運動の理解を補強するものとして大きく様変わりする傾向にあることが指摘できよう。

その他、教科指導に関する事項や得意・不得意な運動種目に関しては、ほぼ同様な傾向にあると言えそうであるが、ここでは専攻の偏り等があり、直接の比較は行っていない。

V 体育は何のためにあるのか

学生へのアンケート結果は、この授業の最後の時間に伝えることとした。少ない人数であったが、学生たちは興味をもってこの結果を受けとめてくれていた。以下、アンケート段階の自由記述と結果のフィードバック後の自由記述を通して、学生たちの意見を考えてみたい。

1 アンケート時の記述内容

アンケート時の自由記述をいくつか示したい。

- 1) バasketボールやサッカーなどは試合形式が多くて、ルールが分からないまま、楽しくやっていた覚えがある。
- 2) 鉄棒で逆上がりをしたら落ちてしまい、トラウマになりできなくなった。
- 3) 高校の時「青年体操」という学校独自の体操があり、準備運動がわりに毎回やっていた。
- 4) 自由に授業というより遊びに近かった。
- 5) とび箱を横にして開脚とびをした際に、足がひっかかって、後ろに倒れた。
- 6) 休み時間や休日に練習し、できるようになった時の喜びは今でも忘れません。
- 7) 小学校のボートボールの授業のことを良く覚えている。5・6年生の時、教師がとても良い人で、仲良く楽しく行おうという雰囲気が強く、とても楽しかった。
- 8) 得意なものと苦手なものの差が激しく、それによって成績が左右されていた。
- 9) 小学校の授業でハンドスプリングを教わり、何度も練習をしてできるようになった。先生がコツや

様々な練習方法を教えてくれた。

- 10) 高校の時の体育の授業は自分たちでやりたい種目を決め、どのような練習をするかなど話し合っ
- て決めた。授業の計画を立てたりするのは楽しかった。また、やりたいものが出来たので授業が楽しみであった。
- 11) できないのにさらし者になって、最悪だった。
- 12) ハードルで転んでトラウマになってしまった。全力で走っているのに「本気で走っているの?」と聞かれた。でも、足の速い友だちが「つま先だけつけて走るといいよ」と教えてくれて、そのようにしたら「早くなったね!」と言ってくれた。
- 13) 高校の体育は体罰に近かった。本当に体育が嫌いになった。
- 14) 高校ではニュースポーツをやることが多く、様々な体験をした。
- 15) 能力重視という感じで、技術や意義についてあまり教わらなかったのも、つまらなかった。
- 16) 小学校の時なわとびができなすぎて、他の人が竹馬になっても、なわとびをしていた。
- 17) 中学・高校の受験期は体育の授業が数少ない息抜きの中のひとつになっていたように感じます。
- 18) 体育は楽しい分野もあれば、勇気がいる分野もあり、あまり好きになれなかった。
- 19) 球技が苦手で、球技の時は苦痛でした。声を出さないと怒られるので、精神的な部分をきたえられました。
- 20) 高校の授業は遊びだった。
- 21) 小さい時は基礎練習が面倒くさかった。今ではそれが大切なことなのだと思います。
- 22) 小学校の時、なぜ走らなければいけないのか教えてくれないまま、義務的に持久走に参加させられた。強制的に走らされたので体育が嫌いだった。

2 最終授業時の記述内容；感想

最終授業時には、アンケート結果で一番関心を持った点について感想を記述し、つぎに全体を通して感じたことや体育の授業に対する感想を自由に記述することを求めた。

関心を持った事項には、不得意種目を教える時にどのようにするか、楽しめる運動種目は何か、自信をもって教えることのできる教科は何か、自信をもって教え

ることのできる種目は何かといった項目があげられていた。これら共通する問題意識は、運動には得意不得意（苦手）が必ずあり、それらに対する対応に少なからず不安を抱いているということである。自信をもって教えられる教科と自信がもてない教科をたずねた意図は、小学校における教科専門をどのように捉えるべきかを問うことがらであったが、不得意種目を教えることに関連して、体育という実技教科への不安を語る回答が見られた。その意味では、この設問も、上記の問題意識に共通したものとしてとりあげることが可能と思われる。

いくつかの記述に触れてみたい。

- 1) 「どのような時でも指導する」「自ら練習し、克服しながら授業に臨む」よりも「他の教師の力を借りる」に人数が多いことに驚いた。確かに得手、不得手があると思うが、極力自分でできるようにすべきではないか、練習をすることも教材研究のひとつではないかと感じた。子どもたちの運動離れは教師のこのような意識から起こっているのではと考える。
- 2) わたし自身体育に不得意な種目があり、それをどう教えるべきなのか悩んでいた。アンケートの結果からは、「他の教師の力を借りる」が一番高かったが、「不得意なものは練習し、克服しながら授業に臨む」も続けて上位であった。この授業の中でも、ハードルや鉄棒など、私が不得意な種目に取り組んだが、その感覚から、克服が可能なのか不安になった。教師という仕事がたえない状況の中では、そうした志を持ちつつも、他の教師に相談したり、他に教授方法がないか探したり、合同体育などの活用方法も必要であると感じた。また、子どもたちの力をより伸ばすということを重視するならば、体育専科制の導入についても前向きに考えるべきなのではないだろうか。
- 3) 今回のアンケートでは体育や運動が好きである、関心があるという肯定的な意見が多かったにも関わらず、体育の指導には自信がないという意見を持つ人がほとんどだという実態を見て。非常に興味をかきたてられた。
- 4) 「自信のある教科と自信のない教科」について、全体的に自信がないと回答した人が多くて驚いた。特に体育や音楽などの5教科以外の科目につ

いては自信のあるひとが少なく、「確かに上手くできる自信ないよなあ」と納得する気持ちと「どうすれば自信をもてるようになるのだろう」という2つの気持ちができて、とても考えさせられた。

- 5) 自信を持って教えられる教科や種目があるというのはすごいと思うが、自信を持ちすぎると、自分が正しいと思いついて考え方が固まりすぎてしまうのではないかと思う。また、その教科について学べば学ぶほど、自分の知識不足に気づき、自信をなくすということもあるのかも知れないと思った。
- 6) 講義全体を通して、体育とは単に技術を教える教科ではなく、運動を通して自分の体の動きを知る教科であるということが分かった。私が体育は技術教科であると思い込んでいたのは、小・中学校の時に自分の体の動きについて考えたことがなかったからだと考える。・・・運動における体の動きを理解し、子どもたちが「こうすればできるのか」という実感を持てるような指導をしてゆきたい。
- 7) この体育の時間を通して、体育は技を出来るようにするための時間ではなく、体を動かすことに慣れたり、その動かし方を理解するための時間なのだったと思った。ある技をできるように教えるのではなく、いろいろな動きを学んでゆくうちに、つながってゆくものだと気付いた。私は体育に苦手意識を持っていたが、それは体の動かし方が分かっていなかったからだと思う。それぞれの子どもが成長段階に合わせて、どうしたら子どもが楽しみながら体を動かせるか、動かし方を理解できるかを良く考えて、子どもに指導ができたと思う。
- 8) 今回のアンケート結果を踏まえ、私が感じたことは、体育という授業の認識の違いについてである。私たちの多くは体育の授業を学びの場としてとらえるのではなく、楽しむ場としてとらえている人がほとんどである。これが体育の授業の現状であると考えている。体育という教科を他の教科と同じく、教え、理解し、活かすものとして、子どもたちに、いかにとらえさせてゆくのが重要であると考えている。
- 9) 体育はどうしても得意、不得意（苦手）というものがあ、苦手な人は体育にマイナスイメージを

持ってしまい、モチベーションが難しいと感じた。運動の大部分は身体感覚が必要になってくる。その部分を重視し、教科体育をできたらいいなと感じた。

- 10) 学校教育の体育ははっきり言ってしまえば、いじめの温床でしかない。運動ができないひとをつるしあげて、あざ笑うだけの場となっているのを小中高と見させられてきた。時に被害者、時に傍観者として感じた不快感は今も強く残っている。決して運動を否定しているわけではないし、むしろ運動は良いことだが、体育はもう一度自身を見直すべきだ。
- 11) 自分が思っていたよりも、体育や運動に苦手意識をもっている割合が高かった。技能の優劣を問われた結果、楽しさというよりも、「できたか、できなかったか」で、体育や運動への意識が決まってしまうように感じた。
- 12) 今回の講義では、体を楽しく動かすことができた。それは「できる」ことがすごいわけでもなく、「できない」ことがダメではないという雰囲気だったからではないかと思う。特に、器械運動については、自分は小中学校とあまり良いイメージを持っていなかったが、今回は楽しくできた。これから指導をする立場になる中で、技ができることの大切さよりも自分の体を思うように動かすことができる楽しさを伝えられたら良いと感じた。

以上、少し長くなったが、学生たちの意見を聞いてきた。少なくとも運動や体育に対する意見・思いは、間違いではなく、自らの体験を通した貴重な言葉だと感じる。アンケート結果に対する疑問や驚き、当然だといった受けとめ方は様々であった。真摯に耳を傾けたいと思う。体育の現状に対する批判も聞くことができた。

Ⅵ おわりに

今回、29年前の学生に対するアンケートをもとに、幾分簡素化した質問紙調査を行い、その振り返りの時間も設定することができた。繰り返しになるが、その比較は、対象者の偏りから正確ではないが、一部、見直してみても、その変化も確認することができた。学校の内外を含めたスポーツ環境の変化は著しく、体育と

いう教科の特性にも影響を与えるものとなっている。取り扱う運動教材（スポーツ教材）の変化はもちろん、子どもたちがふれるスポーツは益々多様化の傾向にあることが分かる。前回の調査と今回の調査から、私たちが危惧することは、体育科の内容に関する子どもたち、直接は学生たちの理解の深まりの程度である。運動教材への知識理解はスポーツ文化の理解に直結し、教授法の理解も、その教材の理解や解釈と結びついている。それらに関して、前回も、今回も、ほぼ同じ傾向を示していた。

今回の感想の中に、技能の向上や技術（技）の獲得ではなく、体の動かし方の理解が重要であり、そのことを学んだという表現が散見できる。私たちは、技能獲得や技術の理解を重要だと考えている。それは今も昔も、体育という教科の内容の主要な部分を構成するものであるからである。健康の概念やその実践理解が、現代社会にあって、もう一つの体育の重要な内容であることは言うまでもない。このふたつの理解を、正確に橋渡しをし、体育科の内容を構築することは、疑う余地のない事柄である。それが、体育科教育学のみならず、体育学（体育科学）、スポーツ科学の中心的な課題と言える。私たちの学校体育分野へ映し出される諸課題は、現代社会の現実を見事に反映したものばかりである。だからこそ、身体教育の重要性をそこに見出すことができるとも言えよう。

体育は何のためにあるのか、今回の学生の言葉から、わたしたちの反省ははじめられなければならないと考える。教員養成学部にとっての教科教育の在り方も含めて、課題は山積している^{注1)}。

注 記

注1) 群馬大学教育学部「平成29年度 履修手引き」

注2) 小学校の場合、教員免許法上は教職専門科目としての各教科指導法2単位は必修とされ、教科科目としての体育は、音楽、図画工作、体育の3つの実技科目から、1単位選択とされている。群馬大学の場合も、これに準じた単位取得を課している。

注3) 松木正忠、萩原 豊、鈴木武文、山西哲郎、松本富子、福地豊樹「教員養成大学学生の『体育』認識について～小学校の『体育』教育に必要な資質への問いかけ～」群馬大学教育実践研究 第5号 77-102頁 1998年

注4) 同上 77頁

注5) 今回のアンケートの主たる質問内容は、その時の質問項

目を用いた。この間の学生の意識の変化を見ることができればと考えた結果である。ただし、対象とした授業ならびに対象者の偏りから、正確な比較は断念せざるを得なかった。したがって、考察においては、参考に留めている。

注6) 松木正忠等、前掲論文 92頁

注7) 同上 92頁

注8) 同上 93頁

注9) 群馬大学の履修指導に置いて、小学校・中学校のふたつの教員免許証を取得することが卒業要件となっている。基本的には各専攻小学校2種と中学校1種免許か小学校1種と中学校2種免許かの選択をする。障害児教育専攻では、特別支援学校教諭1種免許と小学校か中学校2種免許、教育学・教育心理学専攻では、小学校1種免が義務付けられている。したがって、この初等科体育の授業は、学校教育専攻生にとっては必修授業となっている。小学校2種免を取得する学生は音楽、図工、体育の実技系科目のうち1単位を選択することになっており、近年、体育の受講が減っていることが明らかになっている。

注10) 小学校における各運動領域をカバーする意味で、小学校体育科指導法（教職専門科目）の一部に実技種目の球技とダンス（表現運動）を加え、この小学校教科専門科目に、残りの主たる種目の陸上運動、器械運動、水泳領域の実技を行うように設定しているが、この授業の受講生の偏りから、小学校主教材の5運動領域に触れることができなくなっているのが現状である。

注11) 教員養成大学の体育授業の改善に関しては、これまで多くの研究がなされてきている。養成段階で重視すべきは来るべき教員としての「資質能力」であり、そのための方策は、模擬授業や教育実習に焦点化したもの、さらにカリキュラムの工夫、それらの実践の「省察」といった試みであった。筆者は、教育実習中の学生に対して「身体性」をどのように考えるかといった調査を行ったが、そうした学生の認識を問うことも身体＝教育の課題と考えている。木村淳一・福地豊樹他「教師の身体技法に関する研究～教育実習生への予備的考察～」；平成20年度「群馬大学教育学部 学部・附属共同研究報告書」所収 91－98頁 2009年

（ふくち とよき・なかお はやと）